女優

下

渡辺淳一

女優 下

渡辺淳一

集英社

女優（下巻）

一九八三年六月二〇日　第一刷発行
一九八三年六月三〇日　第二刷発行

定価　九五〇円

著者　渡辺淳一

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇
郵便番号　一〇一
電話　出版部　二三八―二八四二
販売部　二三〇―六一七一

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取替えいたします。

© 1983 J. WATANABE　Printed in Japan

ISBN4-08-772436-0　C0093

女優（下巻）——目次

第四章　新生　5
第五章　熟成　61
第六章　孤立　125
第七章　淡雪　161
あとがき　220

装帧 原万千子

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

女優

（下巻）

第四章　新　生

一

芸術座旗上げの大阪公演は、十月十五日から一週間、近松座で開かれた。

座の一行はその二日前に大阪に入り、夷橋北詰の〝岸沢〟という旅館に宿泊した。部屋割りは、一階の浜側の部屋に男優達が、反対側に女優達が泊り、二階には水谷竹紫、川村花菱、小林らが泊り、最上階の三階の部屋は、島村抱月と中村吉蔵、それに松井須磨子と三人が同室になった。

須磨子一人を囲んで男二人が同室というのは　奇妙だが、この組合わせは抱月自身が望んだものだった。

部屋割りに当って、抱月はもちろん須磨子と一緒になることを望んでいた。だが結婚してもいない二人が同じ部屋に泊るのはさすがに気がひける。この時点でも、抱月はまだ「須磨子とのあ

いだに、肉体関係はない」といい張っていた。その手前もあって中村吉蔵を加え、三人一部屋ということにしたのである。

幹部クラスで温厚な中村が貧乏籤を引いたわけだが、中村にとってはいい迷惑である。

部屋は十二畳に床の間という広さだが、この窓際に須磨子の床を敷き、中央に抱月、廊下側に中村という順に寝た。

夕方からの興行に備え、中村は昼間からほとんど部屋にいなかったが、朝と夜には厭でも一緒にいなければならない。中村はできるだけ二人の会話をきかぬように、床にもぐりこんだが、それでも話はきこえてくる。

内容はさまざまだが、ほとんどが須磨子の不満である。

「今度の小屋の舞台は狭くて、思いきり動けやしない。それに大道具もろくに揃ってないじゃないの」そんな舞台についての文句から「なによ今晩のお刺身は、あんな活きの悪いの食べられたものじゃないわ」「下足番のおじさんったら、鼻緒がゆるいというのにちっともなおしてくれない。先生から叱って」といった他愛のないことまでさまざまである。

また「たん栗を食べたいわ、角で売ってるから買ってきて」と抱月に命じたり、さらには、「腰のあたりがだるいの、ねえ、少し揉んで」と、甘えてみせたりする。

同じ部屋にいる中村にはすべてきこえてくるが、須磨子は中村の存在など気にしている様子はない。

これに対し、抱月は「まあ少し我慢をしなさい」とか、「わかったよ」などとなだめながら、

それでも栗を買いにいったり、床の上に起きあがって、須磨子の腰を揉んでやったりする。
「いかがですか、相部屋は？」
水谷達が中村へ同情と冷やかし半分にきくのに、中村は苦笑まじりに答えた。
「僕は他人のことはあまり気にならないほうだから、どうってことはありませんよ」
「それで、お二人は本当になにもしていないんでしょうかね」
「僕は寝つきのいいほうでね、寝てからのことまではわかりません」
実際、中村は抱月と須磨子の私的なことには、あまり関心はなかった。二人がもし体の関係があるのならあってもいいし、それがわかったとしても吹聴する気はない。その点では、中村は大人であった。
だが座員達は好奇心をつのらせ、「たまに二人だけにしてあげたら」などと面白半分に中村にいう。
中村は笑いにまぎらすが、抱月と須磨子のあいだにはすでに関係があったのだから、座員達が淫らな想像をするのも無理はなかった。
夜、中村の寝息をうかがってから抱月が須磨子に近づくこともあったし、舞台が終って、中村が飲みに出たときなど、二人で一緒の床に入ることもあった。またときには、近くの舟宿に別々に入って愛をたしかめる。
東京で別れ別れの生活をしながら、ときに逢引きを重ねるのからみると、これでも大阪での生活はかなり解放されたものだった。

しかし、二人が親しくすればするほど、座員達の反撥は強くなっていく。それももともとは須磨子の我儘への不満から出たものだったが、それを叱るどころか、むしろ甘やかす抱月への不信感が加わって、いっそうエスカレートしていく。

この座員達の反撥が、はっきりした形をとって現れたのは、大阪公演がはじまって四日目の朝だった。

この日、須磨子は起きると突然、今日から、「内部」の母親役をおりるといい出した。

「内部」は「モンナ・ヴァンナ」と同じくメーテルリンクの作で、「モンナ・ヴァンナ」の先の演し物として、東京公演以来続けられていた。このなかで須磨子は母親役をやっていたが、この役は舞台で座っているだけで、ほとんど芝居らしい芝居も、台詞もなかった。出ている場面は長いが、母親らしい姿態で座っていれば誰でもつとまるという、役者としてあまりやり甲斐のある役ではなかった。

東京公演のときから、須磨子はこの役に不満だったが、抱月になだめられて、なんとか勤めていた。それが大阪にきて、近松座の宣伝不足から客の入りも悪く、舞台の気勢もあがらないのに嫌気がさして、突然、おりるといい出したのである。

だが、嫌気がさしたからといって、途中でやめられたのではたまらない。

「あんな役はわたしがやらなくても、そのあたりの女を連れてくればできるでしょう」

須磨子は素気なくいうが、いかに台詞がないとはいえ、ずぶの素人にやらせるわけにいかない。たとえ台詞のない役でも、須磨子が出ているから観客も納得する面がある。水谷竹紫にしても、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo

須磨子の子供役だというので八重子に初舞台を踏ませたのだった。
「プログラムにもちゃんとあなたの名前がでているのだし、いまさらやめたいといわれても困ります」
翻案者である秋田雨雀を先頭に男優達が頼んだが、須磨子は一向にききいれようとしない。
「台詞はなくても、あなたが出なくては舞台が締まりません」
雨雀が頭を下げるが、須磨子はいつもの銘仙の着物を着て膝を崩したまま、そっぽを向いている。
「先生、これは一体どういうことですか。役者がすでに決った役を公演の途中で捨てるなんて、こんなことは許されませんよ」
沢田正二郎が憤慨して抱月に迫ったが、抱月は両腕を組み、ちらと須磨子を盗み見るだけでなにもいわない。
「どうなさるのです。これでは母親役なしでやることになりますよ」
「そんなことをしては観客が納得しないし、第一、翻案者の秋田先生に失礼じゃありませんか」
男優達に次々と迫られて、抱月はようやく顔を上げると、
「他に、手あきの女優はいないだろうか」
「冗談じゃありませんよ、費用の関係で大阪にはぎりぎりの者しか来ていないのはご存じでしょう。手あきの女優なんか、いるわけはありませんよ」
「じゃあ、東京から呼ぼうか」

「いまさら呼んだって、大阪に着くまで二、三日はかかります。今日の公演に間に合いっこありません」
「弱ったな……」
抱月は溜息をつくと、また懐手をして考えこむ。
「弱ったじゃありませんよ。先生が、いま目の前にいる女を叱って、無理矢理でも舞台に立たせればいいじゃありませんか」
みなはそういいたい気持をおさえて、じっと抱月と須磨子を見ている。だが、抱月はひたすら考えこんでいるのに、須磨子は平然と、覚えたての煙草を喫っている。
「こんなところで、いくら話したって埒が明かない。中村さん、われわれと一緒に来て下さい」
沢田は腹立たしげにいうと、中村吉蔵を引っぱって二階へあがった。
ここで再び、男優達は中村を囲んで不満を訴えた。彼等にとって、中村は座員と抱月達をつなぐ唯一のパイプであった。
「大体、あの女も女なら、先生も先生だ。あんな我儘を叱りもせず、東京から女優でも呼べとはなにごとだ。あれで座長だというのだから片腹痛い」
「先生はもう座長でも演出家でもない。女の機嫌をとる、ただのヒモだ」
「そんな失礼なことをいうのはよしたまえ」
中村が注意をしたが、激昂した男優達は黙らない。
「それが失礼なら、島村先生は座長らしいことをなさっているのですか。あの先生より、われわ

れのほうが、余程、舞台のことを心配していますよ」
「それはわかっている」
「それじゃ、中村さんは、われわれと松井須磨子と、どちらが正しいと思っているのですか」
「もちろん、君達のいっていることは正しい。しかし、いくら理屈の上では正しくとも、松井君がやらないというのでは仕方がない」
「仕方がないで済むのですか、それじゃ正義はどうなるのですか」
「いくら正義を叫んでも、世の中には理屈でとおらないことがある」
「そんな馬鹿なことはありませんよ」
「馬鹿げたことだが、しかし理屈を拒否して開き直った女ほど、強いものはないからな」
朝からのいきさつを知っている中村としては、これ以上、責めても、ますます頑なに開きなおるだけだと思う。抱月を責めるのもいいが、抱月とて、開きなおった須磨子には手の下しようがない。
どうみても須磨子は理屈で動くような女ではない。正義や常識論を訴えたところでなんの効果もない。理屈では動かないが、一旦、気が向くと今度はがむしゃらにやり出す。要するに「お天気屋さん」で、そのような気紛れ女にしたのは抱月の責任でもあるが、いまは冷却期間をおくよりない。
だが、といってこのまま放っておくわけにもいかない。すでに昼を過ぎて、そろそろ舞台の準備もしなければならない。

どうなるのか、みな固唾をのんでいるうち、抱月はいたたまれなくなったのか、一人で散歩に出てしまった。

こうなってはもう一度、須磨子に直接話してみるよりない。沢田達は相談のうえ、最後の妥協案として、東京から女優がくるまで、須磨子に出てもらおうということに決った。これが仲間達の譲れるぎりぎりの線である。

早速沢田と倉橋の二人が代表になって、三階の須磨子の部屋へ行ってみると、須磨子は不貞腐れたように布団に入って寝ていた。

「松井さん、さっきの件ですけど」

襖を開けて沢田が話しかけると、須磨子は背中を見せたまま、

「なによ、女が一人で寝ている部屋に入ってきて」

「東京から女優を呼ぶには、いくら早くても二日はかかります。そのあいだだけでも舞台に出てくれませんか」

沢田がいい終るか終らないうちに須磨子が叫んだ。

「いやといったらいやよ、さっさと出ていって……」

あまりの大声に二人は慌てて階下へとび出て、すぐ二階の部屋で待っている仲間に告げた。

「われわれを馬鹿にするのもほどがある。一体、舞台をなんだと思っているのか」

「いっそ放っとけばいいんだ。困るのは座長である島村先生であり、そうなれば須磨子だって考えなおすだろう」

強硬論が続出したが、現実に舞台に立つのは彼等も同じである、須磨子がいないといって舞台が不可能になったのでは、役者としての意地が立たない。それになにも知らない子役の八重子まで困らせることになる。

「島村先生はまだ帰ってこないのか、この重大なときに、どこで遊んでいるんだ」

「いや、先生は遊んでいるのではない。一番苦しんでおられるのは先生なのだ」

そういわれるとたしかに抱月は言葉で強くいえない性格だけに、かえって可哀相に思われる。

「いっそ、ここの旅館の女中にでも出てもらおうか」

倉橋がいったとき、秋田雨雀が膝をのり出した。

「その役、わたしがやりましょう」

一瞬、みなは雨雀を見詰め沢田が慌てて手で制した。

「冗談いっちゃいけませんよ、いま必要なのは母親役をやる女性なのですよ」

「だから、わたしが女装して出ればいいわけでしょう」

一同はもう一度、雨雀を見なおした。

「幸い、わたしは男としては小柄だし、自分でいうのもおかしいが、顔も悪いほうではない」

「しかし、先生は髭を生やしてるじゃありませんか。髭を生やした母親なんておかしいですよ」

沢田がいうと、みなが一斉に吹き出したが秋田は大真面目であった。

「髭は剃ればいい」

「その髭を落すのですか」

雨雀は、たしかに細っそりとした優男（やさおとこ）であったが、それをカバーするように、鼻の下に三角形の、いわゆる大将髭を生やしていた。
「しかし、折角の髭をこんなことのために落していいのですか……」
「それでお役に立つのでしたら、かまいません。髭はいずれ生えるものですから」
「僕は先生の熱意に感心しました。あなたが母親役をやって下さるなら、僕達は思いきり演技をすることができます」
感きわまって沢田が秋田の手をとると、つられたように倉橋も小林も一斉に手をさし出した。
「内部」の翻案者ではあるが、役者でもない雨雀が、自ら髭まで剃り落して女形になるという申出に、若い役者達は感激した。
約束どおり雨雀は髭を剃り、その日、須磨子の着ていた衣裳を着て舞台に立った。
「松井須磨子なんかより、ずっと美しくて風格がある」
役者達はみな喜んで真剣にやった。
だが抱月は、秋田が髭を剃って女形になるときいたとき、「ほう」とうなずいただけだった。そして舞台が終ったとき、「ご苦労さん」と一言礼をいっただけだった。
素気ないといえば素気ないが、抱月としては、それ以上いうべき言葉がなかった。
一方、須磨子は舞台の袖から秋田の姿を一目見ただけで去り、無視し続けた。もちろん、いいとも悪いともいわなかった。
観客はほとんど代役であることに気付かず、気付いた者も、とくに文句はいわなかった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo